

京鹿子

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その五十一



振 り 返 る 君 の 肩 ご し 秋 の こ ゑ
暮 六 つ の 猫 の 丸 き 背 あ き の こ ゑ
開 閉 の 各 駅 停 車 秋 の こ ゑ
烏 瓜 真 し や か に 育 つ 嘘
込 み 合 へ る 二 番 窓 口 神 の 旅
草 じ ら み 効 能 書 き を 疑 は ず



鬼の子や風に転がる細れ石

運さだめ命なき楯円のボール長き夜

ひよんの実を鳴らして減らず口叩く

柿の蒂空の重さを手の内に

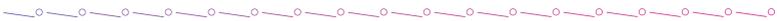
五年の流れ埋火赫のまま

系露忌三句

棉吹いて面差しの似る雲ひとつ

八千草の露のひと粒君の影

「ありがとう」の五音の重み草の花



— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



花すすき

花すすき綴る一齣風となり

秋蝶の眼で追ふ翳の深みかな

絵ごころのいちまい二枚柿落葉

祝・和田照海句碑 二句

秋蝶の導く句碑の山に和す

喝采のどんぐり山の句碑めざす

— 近 詠 —

和田 照海

近松忌

鯰 跳 ん で 地 震 の 兆 の 此 岸 か な

天 元 に 一 石 を 打 ち 金 木 犀

青 北 風 や 投 網 は 川 を 絞 り ゆ く

按 摩 機 に ほ だ さ れ て ゆ く 近 松 忌

一 島 は 蜚 の 通 夜 な り 天 の 川



松本 鷹根



新酒酌む

合流の黙のうねりの秋出水

艶芒猫撫で声の風なじみ

曼珠沙華あつと声あぐ出合あり

稲穂波その真ん中に溺れ坐す

淡海の夕照称へ新酒酌む

近 詠

塩貝 朱千

無人駅

秋天や雲梯の子の足跳ねる

空ばかり見て露草は空の碧

鈴虫の籠ひとつ置き無人駅

大虻の小花くすぐる翅の音

神に一礼白萩に逢ひに来し

英華採集

秋扇をさめてひとつ根性論

京 都 鳥 羽 夕 摩

本来の目的のために使われぬ秋扇。掲句は、若い人達を前にしていろいろ話をしていながら、格好を付ける意味でも秋扇を手にして熱弁を奮っていたのである。ところが会話の中で、近頃の若者のひ弱さが問題になったのか？昔取った杵柄ではないが、ここは一つ根性論を一席、と大上段に構え出したのだ。この時点で秋扇は忘れられ隅に追いやられている。季語の「秋扇」と「根性論」の取合せが実に上手く嵌っている。

二十五時孤独引き寄せ鉦叩

岡 山 佐 藤 千 恵

秋の虫の声は、人に安らぎ感をもたらすものとして俳句が詠まれることが多いが、逆に寂しき音色として捉えると人に孤独感を増長させるのではないだろうか。「孤独引き寄せ」の措辞に作者の心象が伝わってくる、と言える。この中七をさらに読み手に印象付けさせているのが、上五の「二十五時」である。午前一時ではない「二十五時」としたことによつて今日一日がまだ終わっていないことを読み手に読ませている。その分孤独を引き摺っているのである。

「米」てふ字どう回しても敗戦日

東 京 大 政 睦 子

「米」という漢字一字から敗戦日へと発想を跳ばした発見の妙が光る。確かに三百六十度回していてもこの字は、「米」という字である。日本は八月十五日にポツダム宣言を受諾して終戦を迎えたわけだが、終戦の裏にはアメリカ合衆国という大国の存在を無視には出来ない。アメリカの和名は、「米」であるが故にそこに季語と結びつくことになる。漢字一字から季語に行きつかせた俳味ある一句になっている。

神麓集

螢 草 藤岡紫水

月明下志摩の真珠の深眠り
生くもよし死もまた辞せず月今宵
濡れいろにきらめく陽あり螢草
我もまた過客か木の実落つ夕べ
嫌はるもなお紅尽す彼岸花

行く年 沼田巴字

行く年や世を幻として眺め
匂ひたつ女身に似たり枇杷の花
石榴割る嬰食ふ鬼の貌となり
邪を射んと焦げんばかりや冬入日
さざ波を母の唄とし浮寝鳥

揚羽蝶 井巴水

七人の敵も失せて夜夜の月
秋蟬の声も混じりし向かひ風
香木を飾り人工冷氣満つ
地図になき泉樹林が躍動す
喪家二日訪ぬる影は揚羽蝶

無我の秋 植村蘇星

相応に生かされ生きて無我の秋
神無月凡には凡の生活かな
時は今土壘燃え立つ曼珠沙華
朝な夕三顧の礼や花すすき
切干の軽ろきうねりや夕心

神麓集

秋のこゑ 北川孝子

ぬけがらのやうな昼月秋のこゑ
秋のこゑ曖昧な世の透けて来る
ほどほどの身の処しかたや秋のこゑ
秋声や忘れ上手のおそろしき
秋のこゑこころの張りのもどり来る

沙羅の花 直江裕子

研ぎやせのナイフ大事に終戦日
乱切りの茄子に咎ある母がある
炎天をきて骨髓に針うたる
沙羅の花遠いか近いだけのこと
時に死とたはむれる日も合歡の花

無川の用 高木晶子

事務的に引く削除線鶏頭花
枯れても枯れても諦らめられぬ青芒
秋風に吹かれて白し古着店
風の唄陽の唄孕む黒葡萄
長月や無用の用の二つ三つ

実柘榴 伊藤希眸

数知れぬ実柘榴生れり本音まだ
月高し風出て森の箸ゆれず
挨拶の言葉途切れる秋霰雨
秋彼岸風のとよりに切符買ふ
桃太郎のはなしどつかと秋あかね

神麓集

見抜けていたり 奥田筆子

空蟬やいのち見事に抜けみたり
しばらくは秋の蚊を見失ひたり
しろじろと草に根のあるねはんかな
ひまはりが無伴奏で咲いている
呼び捨てに甘さのありて草の露

裸の木 井上菜摘子

父を愛し父をゆるさず冴ゆる星
白菜を真二つ単純な迷路
きれいごとから脱いできて裸の木
すでに体温失せし喪服よ冬三日月
ふくろふが鳴く路線図の北の果て

祇王祇女 村田あを衣

路線図に外れ秋蝶翳透きぬ
露草へ露おくえにし祇王祇女
花野出でなほ残像の万華鏡
分別は人の世のこと穴まどひ
白萩は風をにごさず神の宮





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

雷激し漂流先は手術室

幻痛に目覚め病窓真夜の月

秋扇話のながき見舞客

リハビリの四十八手や冷房裡

萩零れもう遊びでは終らない

母を隠す体温越えの猛暑来て

臨終の蟬と行き合ふ念仏寺

秋扇納めてはなし本題へ

一村の十戸に秋の水たうたう

蛇穴に生前葬を抜け出して

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

ねこじやらし淋しがりやの風集め

割算の余りひぐれの貝割菜

新涼の一言一語ひとしづく

錆鮎の川の流れに抗はず

遠花野まだゆれてゐる十七才

青芭蕉少年つばさに乗りたくて

二つ三つ柘榴ペルシャの涙壺

しみじみと思ひ出すため吾亦紅

露草にふれてひと日の血を清め

もてあます葡萄一粒ほどの鬱

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

心太すすりて過去は口にせず
福 山 亀井 福恵

丹の鳥居へ北斎の波朱夏の波

芙蓉閉ぢ起伏なき日をよしとする

星流れ闇は深さを誇張する

阿羅漢の寄せる眉目も炎暑かな

穴惑ひ手の平見つむ生命線

夕暮れて彩の寂びゆく花野かな

風ついと変りし宙やうす紅葉

立秋や脳細胞に修正液

一喝は父の愛情墓洗ふ

無花果の熟れてふる里近くする

青柿や運否天賦の風あそび

影動き翳動かざる秋の水

青蔦や帯に短かし人の伽

秋水にうかぶ写生の椅子一つ

通夜帰りうしろから来る秋のこゑ

名月や一木一草酔ひ睡る

母に逢ふ湖底へ続く月の道

はじめかみのくれなひ淡し備前皿

星へ発つたましひひとつ後の月

福知山 西村 白杼

京都 菊池 和子

高槻 安田 優歌

秋扇をさめてひとつ根性論

河鹿笛消えて夜鳴きの岩ばかり

忘れもの探しに入る大花野

自転車に空気がばんばん夏の逝く

二十五時孤独引き寄す鉦叩

夜の潮豊かに寄せて新松子

突然に逝つてしまひぬ月に雲

鈴虫の声溢れ出す留守の家

「米」てふ字どう回しても敗戦日

戦ふは己が虚栄と百舌猛る

米磨汁浴び朝顔の仰ぐ天

手鏡は伏せておくもの秋愁

新涼や疎遠の友のEメール

あの土手のひよどりばなや今朝のカフェ

吾亦紅青き字小さく予定帳

秋高し神意に沿ふ鳥すいと

京都 鳥羽 夕摩

岡山 佐藤 千恵

東京 大政 睦子

アリソナ 伊吹 之博

